

街歩きで出会った古刹とつながる数奇な糸―濟松寺―

横浜歴史研究会 高尾 隆

古道「上州道」の起点として栄えた神楽坂

田安御門から上州道に通じる（早稲田通り）①牛込御門は、江戸六口の一つである。飯田橋駅西口の改札口を出ると、すぐ目の前が、牛込見附の牛込橋である。牛込濠の下位に飯田濠（右側）があり、その高低差は、牛込濠（左側）を堰き止める土橋で築かれている。

江戸湾から隅田川に入り、柳橋より神田川を経て、飯田濠まで荷船が入った。②神楽河岸で荷揚げする荷役を軽子と呼び、神楽坂に並行した右手の坂を③「軽子坂」と呼んだ。

④兵庫横丁…神楽坂花街の面影の残る石畳の小道

⑤寺内公園…江戸時代行元寺の岡場所があった。その昔柳屋金五郎や勝新太郎の住まいがあった。

⑥文具相馬屋…1659年にこの地で紙屋を開く。漱石などの文豪が使用した原稿用紙発祥の地。

・毘沙門天善国寺…1595年家康の命で創建。徳川光圀も信仰を寄せた日蓮宗の名刹。この狛犬は寅に縁があり狛寅である。

⑦光照寺…上野国勢多郡大胡の領主大胡氏が関東に移り牛込氏となり北条氏の家臣となり牛込城を築いた場所。

⑨赤城神社…大胡氏が牛込に移住した際、郷里の「赤城神社」を勧請した。



「奥讃岐」と呼ばれ春日局の後の大奥を支えた祖心尼所縁の古刹－濟松寺

将軍家光より与えられた1万5千坪の大寺院

神楽坂を上り切り地下鉄同駅出口から1km程に榎町交差点がある。ここから江戸川橋方面へ右に曲がると、ほどなく白壁に囲まれた大きな寺院が現れる。ここが、家光が亡くなる時、「百年の後、尊骸は日光に葬ると言えども、英霊は必ず濟松寺に留まらん」と言い残した寺であった。

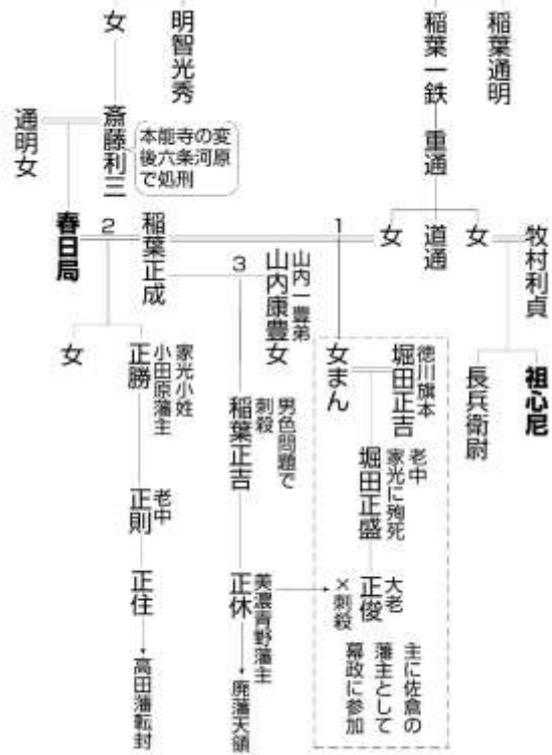
本院は臨濟宗京都妙心寺派に属すが、禅学を好んだ家光が沢庵和尚に品川東海寺を開山させ、さらにここにも建立させた相手は誰だったのか？それが仏名祖心尼と呼ばれる女性である。

春日局の縁戚につながる祖心尼の出自

祖心尼の父は秀吉に仕えた伊勢岩手城主牧村利貞である。利貞は文禄征韓の際、かねてより懇意にしていた前田利家に、出陣の際愛娘祖心尼を託した。しかし利貞は帰還中に病死したため祖心尼は前田家に育てられる。祖心尼の母は稲葉重道の女でその同じ姉妹が春日局の夫となる稲葉正成の最初の妻である。

従って春日局は祖心尼の叔母にあたり、祖心はその姪女になる。この関係が祖心尼の大奥、そして将軍家光との結びつきにつながる元となる。

春日局の祖心尼・幕府との関係



祖心の法話が奥女中の心をつかむ

召し出された祖心尼は、客分として待遇を受け、篤い尊敬を払われた。家光は禅学を好み、沢庵和尚を敬信していた。祖心尼も家光に法話を行った。家光が沢庵から聴いた事を祖心尼に尋ね、答えたものが祖心の著述『挙一明三』に残されている。祖心は大奥の女子達にも禅話を試みた。そのわかりやすい教えは奥女中の心をつかみ、たちまち祖心の信奉者となった。

一方春日局が没してから祖心に対する家光の信任は厚くなるばかりで、大奥の一切の取り締まりを任じられるようになる。そうしてその奉公は家光が亡くなるまで10年余り続く。「奥讃岐」と称されたのは、大奥の差配を担った祖心を、当時の幕府の表向きを牛耳った酒井讃岐守忠清に例えたものであった。

祖心尼のために家光が寺院建立

正保3年、家光は牛込の敷地を祖心尼に授け、寺院を建立し家光が秘蔵の維摩の木像を下し置くことを酒井讃岐守に命じた。山号寺号は蔭涼山濟松寺。大樹天下蔭涼、臨濟宗の濟に松

平の松の意から付けられた。

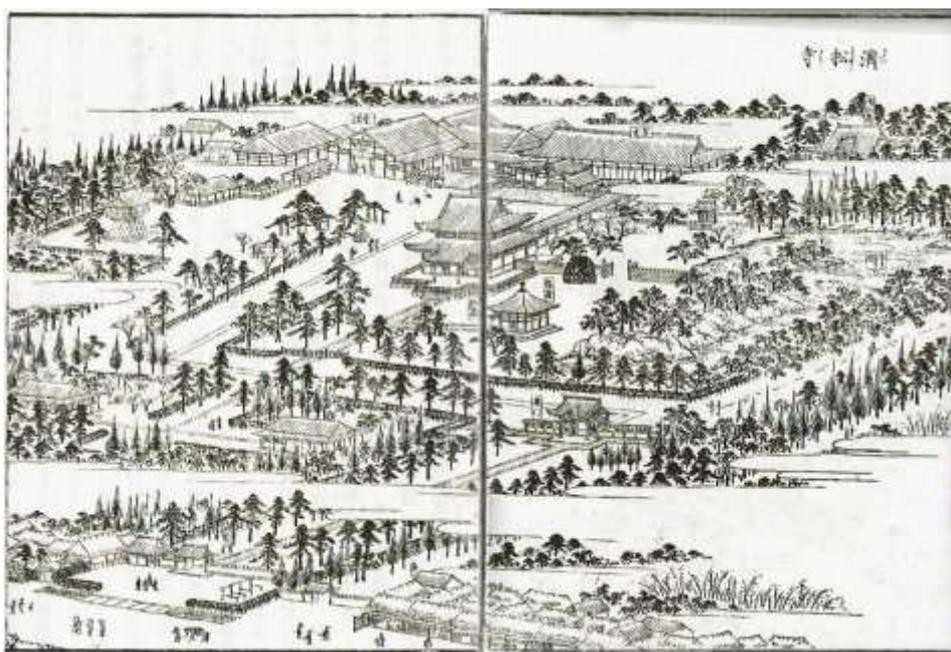
慶安4年4月、家光死する時はまだ仮普請であったため「その功を竣らずすこぶる遺憾とす。尊骸は日光に葬るといへども英霊は必ず濟松寺に留まらん」と言い残し寺内に一字を建て昵懇者参拝の霊所とした。

江戸名所図会には「蔭涼山濟松寺 牛込榎町にあり、京都妙心派の禅窟にして昔は妙心寺より輪番せしという本尊釈迦如来を安ず。(中略)ご仏殿の前の池を鳳凰池と號く。靈龜水は芳心院の池にありて、寛永の頃はお茶の水に掬いさしめ給うとなり。」とあり、江戸時代は輪奂の美を備えた大寺院であった。

祖心尼が大奥を辞してから寺は、大奥の女性達の参拝が引きも切らず、参道はさながら美女たちのファッションショーのようであった。

延宝3年(1675)3月11日祖心尼は88歳の長寿をもって入滅する。

余生を濟松寺で過ごし、江戸の知性として多方面からの信頼を集めた。寺院には、仏門へ帰依したいという大奥の女性たちが身を寄せ、たくさんの庵や塔頭が建てられた。



徳川につながる仇敵石田三成の血縁

それでは祖心尼の曾孫である家光の最初の子“千代姫”はどうなったのか。前述の系図を見ると千代姫の祖父岡吉右衛門の母は石田三成の次女“小石殿”となっている。

なぜこのようなつながりが生まれたのか？そのことを春日局は知らなかったのか？徳川家も知らなかったのか？関ヶ原の後、石田三成の遺児達はどうやって生き伸びたのか？

心穏やかならざる事実はどうのようにして生まれたのか？時は関ヶ原で三成が敗れた頃に戻る。三成には三男三女、6人の遺児がいた。長子重家は豊臣秀頼の小姓として仕えていた。父の敗北、佐和山城落城を知ると大坂から逃亡し、出家することで一命を留め京都の妙心寺の塔頭寿聖院へ入る。妙心寺は後の春日局（隣祥院）、祖心尼（雑華院）が帰依する所となる場所であった。

これを助けてくれたのが津軽信建だった。信健の父は津軽為信で、南部家からは謀反と呼ばれる弘前藩を独立に導いた人（初代藩主）である。

豊臣秀吉が天下を治めようとしていた頃、津軽家は南部家と領土問題で対立していた。為信は秀吉の大名間の紛争を禁じる総無事令による奥州仕置きと呼ばれる征伐の対象にされそうになりお家の危機を迎えるが、石田三成の執り成しにより危機を免れる。

三成は信健の烏帽子親も務めており両家は浅からぬ関係であった。さらに次男重成は津軽信健の助けを借り、若狭から海路で津軽に逃亡、名を杉山重成と改め北津軽の開拓に従事した。一説には津軽家の侍大将になったとも言われる。また三成の三女（辰姫＝北政所養女）は津軽為信の*跡継ぎ津軽信枚に嫁

ぎ、弘前藩三代目藩主（津軽信義）の生母となっています。

*兄信健は1607年京で若死にする。

津軽家は恩のある石田三成の子供を必死に守ってくれた家でもあり、津軽家の義理堅い一面が見える。

尾張徳川家二代目に嫁いだ千代姫

家光の長女千代姫は寛永16年に尾張2代藩主徳川光友と婚姻する。2男2女を生むが、家光の血筋で女系はこの千代姫のみである。

長子綱誠が3代目と続き、4代目吉道は23歳で病死、嫡男五郎太は3歳だったことから、叔父の継友が藩主となる。

徳川家につながる三成の血筋はこれで途絶えるが、吉通の子千姫（信受院）が内大臣九条幸教に嫁ぎ、その家系が二条家・皇室にいまもつながっている。

この尾張徳川家の継承問題は時の将軍家宣が新井白石に7代将軍の後継について語った言葉に残されている。

「天下のことは私すべきではない。跡継ぎが無くはないが、幼い者を立てて世を騒がしくした例も多い。そこで余の跡は尾張の吉通殿に譲ってはどうか。ないしは鍋松（徳川家継）に継がせておき、尾張殿を西の丸に入れて後見とし、政治を任せるか。どちらがよいであろうか」と尋ねる家宣に対し、白石は

「ご立派なご配慮ではございますが、どちらも必ずしも適切とは存じませぬ。お跡継ぎが二、三に分れたときの派閥の争いが世を騒がせました例は、不幸にも過去に繰返されて参りました。上様（家宣）のお世継ぎに鍋松君がおありなのに尾張様の名があがれば、心無く二手に動きだす者もできて参りましょう。御三家をはじめ御一門の方々、譜代の御家来

□

がかくお揃いのうえ、守り立てますれば、若君が御代を継がれまして何のご懸念が有らましようか」と答えた。さらに家宣が「幼い者(家継)に万一のことがあれば」と言うと、

「そのために神君(徳川家康)は、御三家をお立てになりました」と答え、将軍継嗣は家継に決定した。

[付録]400年の怨念を抱える南部対津軽の確執

中世の戦国期、青森と岩手の北部は、南部氏の支配下にあった。その南部氏の家臣(家来)として、津軽地方の統治を任されていたのが津軽氏(大浦氏)である。

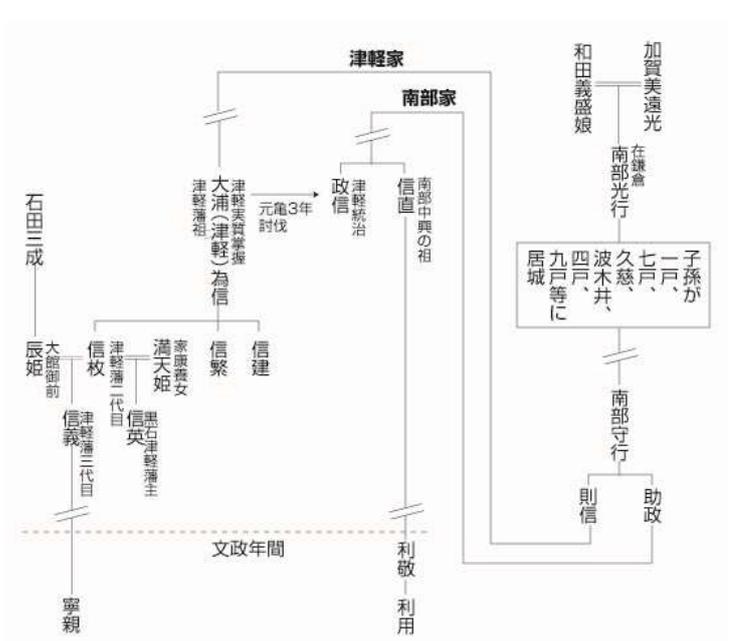
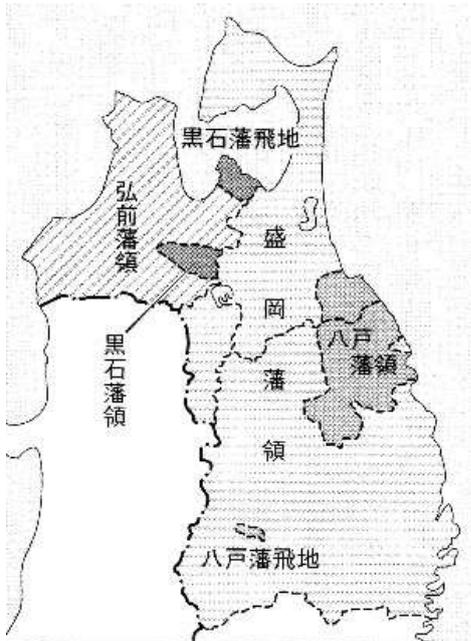
戦国の世から安土桃山時代に入る頃、津軽氏は主家の南部氏で起きた相続争いに巻き込まれ、謀反の疑いをかけられる。しかし前述の通り、石田三成のとりなしなどがあり詮議をまぬがれる。

ただし南部藩にすると元はと言えば津軽は家臣(陪審)の身である。津軽の独立は謀反行為であり、津軽氏は、「主家に反逆した裏切り者」である。秀吉の死後、「関ヶ原の戦い」では、津軽氏と南部氏はともに徳川方に味方する。その結果、津軽氏と南部氏は徳川

幕府のもとで共に「外様大名」としての道を歩み始める。泰平の世江戸時代に入ると、津軽藩と南部藩の確執が本格化する。津軽藩と南部藩の確執は、本家と分家である「藩士同士の確執」から始まる。

積年の恨みが生んだ相馬大作事件

天明4年(1784)に、盛岡藩十一代藩主となった南部利敬(としかか)は、蝦夷地(北海道)警護への功績と藩政推進のための官位昇進運動を展開し、文化元年(1784)、それまでの従五位下(じゅごいのげ)から四品(しほん・四位)に昇進する。ところがこの運動を展開するなかで文化2年(1805)、弘前藩九代藩主の津軽寧親(やすちか)が4万



6,000石から7万石に高直しされました。このことに不満を抱いた利敬は、蝦夷地永久警護を条件に高直し運動を行い、盛岡藩は文化5年(1808)に20万石に高直しされ、利敬は侍従に任官します。しかし弘前藩も同じ日に、蝦夷地警護の功によって10万石に高直しされます。このことが「相馬大作事件」の引き起こすことになる。

文政4年(1821)、江戸から帰国途中の弘前藩九代藩主の津軽寧親(やすちか)の狙撃未遂事件が発生します。首謀者は盛岡藩の下斗米秀之進(しもとまいひでのしん)、偽名「相馬大作(そうまだいさく)」。盛岡藩二戸郡福岡村(二戸市)に生まれた秀之進は、18歳で江戸に出て名剣士として知られていた紀州藩士平山行蔵の門下となり武道に精進、四傑の一人と呼ばれるほどに腕をあげて帰国し、郷里・福岡に講武場兵聖閣を設けて武術の教授を始めます。

そんな矢先の文政3年(1820)、盛岡藩主利敬(としかか)が39歳の若さで世を去り、遺領を利用(としもち)が継ぎます。利敬の早すぎる死は、弘前藩に対する積年の鬱憤が原因といわれます。この当時、利用はまだ14歳で無位無官、それに対してもともと家臣筋とみられていた津軽寧親は従四位下(じゅしいのげ)侍従に叙任されている。これに不満を抱く秀之進は、寧親に果たし状を送り辞官隠居を勧め、それが聞き入れなければ「侮辱の怨を報じ申すべく候」と暗殺を伝える。

文政4年(1821)、秀之進は江戸から帰国途中の寧親を秋田藩白沢駅(大館市)付近で狙撃しようと計画するが仲間の密告によって失敗、藩を出奔(しゅつぽん)して江戸に逃れ「相馬大作」と名を変えるが、幕吏に捕ら

えられ獄門の刑に処せられる。しかしこの事件によって寧親は隠居に追い込まれたことから、結果的には秀之進の目的は達せられたことになる。

〈参考資料〉

- ・史料『祖心尼』蔭涼山 濟松寺発行
- ・『春日局』福田千鶴著 ミネルヴァ書房
- ・『石田三成』旺文社 戦国・幕末の群像
- ・『石田三成とその子孫』白川 亨 新人物往来社
- ・『蒲生氏郷』童門冬二 集英社文庫
- ・『南部と津軽の歴史的な確執』ザ・戊辰研マガジン 2020.4月号